ゼミナール 中国文化

服飾編

カラー版

華梅［著］
徳永 冬美［訳］

上海伝播出版社

ゼミナール 中国文化

服飾編

華 梅［著］
徳永 冬美［訳］

五洲傳播出版社

图书在版编目（CIP）数据

服饰 ：日文 / 华梅著 ；（日）德永冬美译著 .
-- 北京 ：五洲传播出版社 ,2016.10
（中国文化系列 / 王岳川主编）
ISBN 978-7-5085-3554-8
Ⅰ . ①服… Ⅱ . ①华… ②德… Ⅲ . ①服饰文化－中国－日文
Ⅳ . ① TS941.12

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2016) 第 239868 号

主　　编：王岳川
出 版 人：荆孝敏
统　　筹：付　平

中国文化·服饰

著　　者：华　梅
翻　　译：（日）德永冬美
责任编辑：苏　谦
图片提供：华　梅　FOTOE　CFP　东方 IC
出版发行：五洲传播出版社
地　　址：北京市海淀区北三环中路 31 号生产力大楼 B 座 6 层
邮　　编：100088
发行电话：010-82005927　82007837
网　　址：http://www.cicc.org.cn　http://www.thatsbooks.com
印　　刷：北京浙京印刷有限公司
版　　次：2017 年 1 月第 1 版第 1 次印刷
开　　本：787×1092mm 1/16
印　　张：10
字　　数：170 千字
定　　价：108.00 元

目　次

序 ……3

Part 1　未開の文化から帝政へ ……7

漢代の女性の服

『弈棋仕女図』

古代の「ワンピース」から平服の長衣へ ……7

人々が信じ難い絹 ……14

皇族の衣服と衣服制度 ……22

軍装改革家

趙武霊王 ……30

洒落ている褒衣博 ……37

最も美しい唐装 ……43

優雅で着心地のいい私服 ……53

文化の集合体

官服 ……58

Part 2　帝政の滅亡　洋服の到来 ……66

纏足をした女性

三つ編みの切断と脚の解放 ……66

長袍と洋服の共存 ……69

中西が組み合わさって改良されたチャイナドレス…74

Part 3 日進月歩の当代服装 ……81

緑の軍装、赤い腕章を着けた紅衛兵

T台上のボヘミアン

農工服は一種の革新 ……81

かつて皆が着た軍便服 ……84

率先して中国に入ってきたラッパズボンとカエルメガネ ……88

中国を席巻したデニム ……92

長い間続いたボヘミアンスタイル ……95

「反通例」服装が一時流行 ……99

はだけた服が儒家思想を覆した ……104

奇妙な中国の靴と足の服 ……108

捨てきれない漢服への思い ……115

トレンドファッションに押し流され後にはひけない若者 ……122

Part4 多民族ファッションの花園 ……125

祭日盛装を着るジーヌオ族の婦女

少数民族ファッションの美しさ ……125

たくさんある民族伝説 ……132

民族ファッションの特徴的な工芸 ……137

ネット時代の原生服の行き場 ……144

付録：中国歴史年代早見表 ……153

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

序 ……3

Part 1　未開の文化から帝政へ ……7

漢代の女性の服

『弈棋仕女図』

古代の「ワンピース」から平服の長衣へ ……7

人々が信じ難い絹 ……14

皇族の衣服と衣服制度 ……22

軍装改革家

趙武霊王 ……30

洒落ている褒衣博 ……37

最も美しい唐装 ……43

優雅で着心地のいい私服 ……53

文化の集合体

官服 ……58

Part 2　帝政の滅亡　洋服の到来 ……66

纏足をした女性

三つ編みの切断と脚の解放 ……66

長袍と洋服の共存 ……69

中西が組み合わさって改良されたチャイナドレス…74

Part 3 日進月歩の当代服装 ……81

緑の軍装、赤い腕章を着けた紅衛兵

T台上のボヘミアン

農工服は一種の革新 ……81

かつて皆が着た軍便服 ……84

率先して中国に入ってきたラッパズボンとカエルメガネ ……88

中国を席巻したデニム ……92

長い間続いたボヘミアンスタイル ……95

「反通例」服装が一時流行 ……99

はだけた服が儒家思想を覆した ……104

奇妙な中国の靴と足の服 ……108

捨てきれない漢服への思い ……115

トレンドファッションに押し流され後にはひけない若者 ……122

Part4 多民族ファッションの花園 ……125

祭日盛装を着るジーヌオ族の婦女

少数民族ファッションの美しさ ……125

たくさんある民族伝説 ……132

民族ファッションの特徴的な工芸 ……137

ネット時代の原生服の行き場 ……144

付録：中国歴史年代早見表 ……153

序　美しいを長く楽しめる中国の服飾

中国の服飾の文化は、原始社会、旧石器時代後期まで遡ることができる。考古学では、約２万年前、現在の北京周口店一帯の生活していた原始人がすでに装飾品を身につけていた、ということを発見している。そこでは、白い天然石、黄緑の小石、獣の牙、フネガイの殻、魚の骨、くぼみを削ってだした鳥の骨などが出土しており、全てに精密な穴があいていて穴には赤鉄鋼の粉が残っていた。専門家はそれらが落ちていた位置を分析し、首の装飾品であると推測している。当時の人々が装飾品を身につけていたのは美のためだけではなく、お祈りや厄払いのためであった。出土した骨の針は楕円形にひこうとした形跡を残しており、原始人は針で獣の皮を縫う技術を持っていたことがわかる。

1973年、甘粛で出土した人形型彩土器、約5600年前のものである。顔ははっきりとしていて、前髪があり髪を振り乱している。瓶のデザインは三段に分かれていて、曲線と三角形と柳の葉が組み合わさった模様をしており、彼女の洋服のようである。

中国西部の青海省では5000年以上前の彩文土器が出土している。これらの土器に描かれた模様は、狩りの踊りを模倣しているように見え、踊り子が髪飾りをつけているもの、腰に尾のようなものをつけているも

今から 1.8 万年前の山頂洞人が制作した骨の針

新石器時代の遺跡から出土した首飾り

青海で出土した彩土器、約 5000 年以上前のもの。ぼってりとしたスカートを来た人たちが手をつないで踊っているようなデザインであり、この様なスカートは伝統的な服にはあまり見られない。

唐　周昉『調琴啜茗図』（一部）　唐の官女の生活が描かれている。唐の服飾は中国の伝統的な服飾史の中でも最も輝いていたとされている。

の、ぽってりとしたスカートを履いているものもある。甘粛で出土した土器はさらに人々の目をひきつけるようなもので、美しい少女のような形で、前髪は眉の位置で切り揃えており、後ろ髪は肩までばさばさと伸びている。顔ははっきりしており喋りだしそうだ。首から下はデザインが続いていて三段にわかれており、斜線と曲線と三角形などが組み合わさっている。もしかしたら製作者は本当に可愛い女の子を手本にしたのかもしれないし、その子が履いていた綺麗なスカートをデザインしたのかしれない。

中国の衣冠制度は西周（紀元前 1046 ～紀元前 771）にはすでにできあがっており、周王朝には「司服」「内司服」「玉府」などの専門的な役職があり、王や王妃の衣服や宝石などを手配していた。帝王から庶民に至るまで、それぞれ服装に規定があった。漢（紀元前 206 ～ 220）からは、正式な歴史とされている『與服志』などの文献にこれらの規定が全て記録されている。

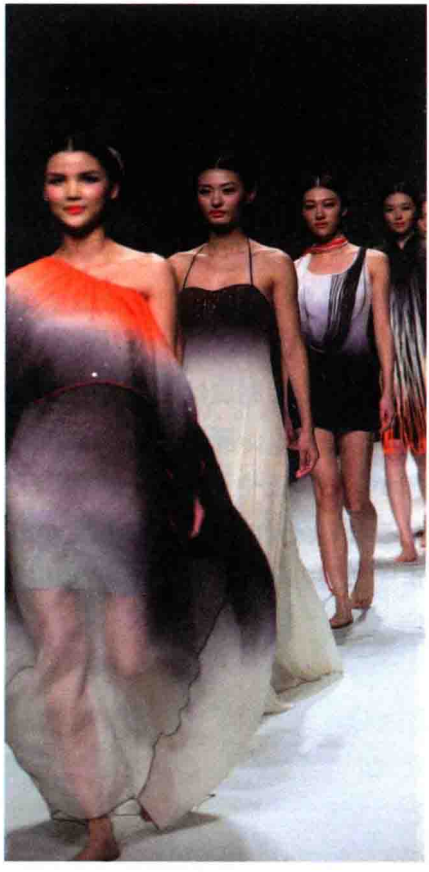
唐（618 ～ 907）に入ると、国も勢いを増し、開放的な社会になり、服飾は華麗で新鮮で、流行の周期も非常に短くなった。女が胸元の開いた短いシャツや小さめの男性用の服を着ることは、あの当時の社会の包容力が明らかに大きくなったことのシンボルであった。唐の服飾は中国の伝統的な服飾史の中でも最も輝いていた。

1840 年以降、中国は近代社会に入り、外国からのビジネスも増え、上海のような中国と西洋の文化が融合したような大都市もうまれた。欧米の流行の波の下、中国の服飾にも変化が起きた。

20 世紀前半の中国の服飾はチャイナドレスや男性用の長い上着、中山服、学生服、洋服、中折れ帽、ストッキング、ハイヒールなど、東西服飾文化が大きく融合した時代を経験した。しかし 1949 年、中華人民共和国が誕生した後、農工服などの肉体労働者の地位をあげるような服がまた流行した。20 世紀 70 年代末の改革開放以来、ジャケットやフレアパンツ、ジーンズ、ショートデニム、ビキニ、制服、パンク、T シャ

ツなどが相継いで中国人に喜ばれた。異なる時期、異なるスタイルの服は時代の変遷の証拠となる。

56の民族によって成るこの多民族国家では民族間の融合に伴って、服のデザインと風習も絶えず変化しており、花園の様々な花に似て、美しさを争い、一度では楽しみ尽くせない。

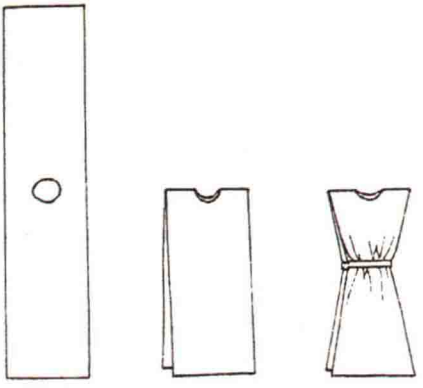


2013年11月、中国国際ファッションショー2014春夏コレクションが北京で開催された。画像は中国人デザイナーがデザインした作品の紹介。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

未開の文化から帝政へ

古代の「ワンピース」から平服の長衣へ



被り式の上着の制作イメージ図（華梅　絵）

中国甘粛加羅辛店から出土した5000年あまり前の彩土器にはいくつか単独の人形があった。これらは立ち話をしているようにも見え、また外出しようとしている人物を切り紙細工で表現したようなものを彷彿とさせる。人形たちが身に付けているものは膝丈の腰の位置で絞っている長い上着で、今日のワンピースのように見える。もし構造から分析するならば、20世紀にアメリカのインディアンがこのような被る式の肩掛けを着ていた。またペルーでも花模様の布の真ん中を切ったような長めの口がある衣服が出土しており、基本的には人類が太古の昔に使っていた被るタイプの上着であると判断できる。中国の正史の中にも記載があり、4世紀から5世紀にいたるまで、日本人も似たようなものを着ていた。この様な服は2人分の身長ほどある長めの布から作られており、中央で半分に折り、真ん中に丸い穴をあける。穴から頭をだし、前後に布が1枚ず

つ、そして紐で腰のあたりを縛って着る。これこそが人類がまだ始まったばかりのころに作られた傑作であり、今の時代においても非常に美しいものである。

中国古代の人々の服装の構造は、主に２種類で、１つは天が上に、地が下にあるというのを象徴したもので、もう１つは、上下が繋がっている上着である。上着は一貫して中国人の風格と気質を体現しており、もしくは太古の昔から「ワンピース」に至るまで、発展をつづけ、様々な変化をしてきたのかもしれない。

戦国時代（紀元前475～紀元前221）、中原地帯一帯は男女関係なく深衣（中国漢族の礼服）を着ており、深衣は上が着物、下がスカートで、繋がっている。作成の際には決まりがあり、他の衣服に比べると確かに特徴がある。漢の時代儒家の経典『礼記』では「深衣」という章があるほどだ。深衣は礼儀の制度に合わせ、規則に合った丸や四角、また対照であること。長さにも決まりがあり、肌を露出せず、また地面を引きずらない丈であること。前の襟は長く大きな三角形をつくりだし、ま

漢代の女性の服、繞襟深衣、襟が三重になっており、雲の刺繍が施してあり、たもとと襟には綿でふちがしてあり、着ると非常に目を引く。（高春明　絵　周汛、高春明著『中国歴代婦女粧飾』より抜粋）

た上着に沿って身体の後ろまで巻けるようになっていること。歩きやすくするために、腰から上は布の縦幅でつくり、腰から下は斜め幅でつくれるように腰の部分を切断すること。袖の脇の部分は肘を動かしやすいように、袖の長さは大体手から降り替えしたときに肘にちょうど到達するくらいにすること。深衣は文化人でも武士でも着て良いし、儀式の際でも、行軍、戦闘の際に着ても良い。深衣は礼服中では第二の等級であり、機能は完璧に備わっておりかつ資源を無駄にすることもなく、スタイルも素朴である。この時代の深衣のイメージは、古墳から出土したいくつかの絹織物に描かれた絵からもわかるとおり、同時期の多くの陶製の人形や、木製の人形もこのような衣服であり、デザインがはっきりしているだけでなく、花模様も明らかである。

深衣の材料はほとんどが白い麻で、祭事の際は黒い絹を使う。へりに彩色を入れることもあり、花の刺繍を施しているものや花模様を描いているものもある。深衣を着る際には、長めの三角形の前おくみを右に向かって巻き込み、それから絹ひもを使って腰と股の間で結ぶ。この様な絹ひもは「大帯」または「紳帯」と呼ばれ、ひもには必要であれば笏板（細長い板）をさすことができる。昔、笏板は大臣が朝廷で使う以外にも、役職のついてない人が普段から何かを記録する際も使っていた。その後、遊牧民族の衣服が中原地帯の人々に影響を与えるにつれて、革のベルトが中原地区の衣服に現れるようになった。結ぶために革のベルトに更にフックをつけた。フックは精密につくられており、戦国時代の新しい芸術作品の１つとなっている。長いフックは30センチメートル程もあり、短いのでも３センチ程ある。石、骨、木、金、玉、銅、鉄などを材料にしたものは全て揃っており、豪華なフックは金銀で形作られ、または花模様が彫刻してあるか、玉玦（一部分を欠いた環状の玉）や瑠璃をはめこんだもの、他にも、例えば猿型のフックのような、そのまま動物の形になっているものある。

漢の時代に突入すると、深衣は裾袍、いわゆる一種の三角形の前襟と

湖南長沙馬王堆漢墓絹織物絵画の中の墓主と従事者の像（李暁玲　模）

丸いすそがある長い服へと変化した。同時に「襜褕」と呼ばれるまっすぐな襟を持つ長衣も流行した。この服が流行したばかりのころは、礼服としてはならず、外出することも客人を迎えることも許されなかった。『史記』にも襜褕を着て宮廷に入るのは王を敬っていないとされていないと書かれていた。このような禁忌があるのは、漢の時代以前の中原地帯の人々が履いていたズボンはまちが無く、2本の布がお腹の前で繋がっただけのズボンであり、現在の幼児は履いている股の部分が空いたようなものだった。ズボンの脚の部分しかないので、上着をしっかりと中まで巻いていないと容易に肌が見えてしまうのだ。儒家の経典で服装の規則を取り上げる際、何度も強調していたのが、非常にどれだけ暑くても上着をひっぱりあげてはいけないということと、また浅い水の上を歩くとき以外も上着を上げてはいけないということであった。中原地帯の人々の基本的な座り方はひざまずいた後に座るもので、「跽坐」と呼ばれ、「箕坐」（両足を伸ばしてちりとりのように座ること）は禁止である、と明文されていた。この様な決まりは当時のズボンのデザインと関係があり、恥をさらさないためであった。その後、中原の人々と西北地方の騎馬民族との交流が日に日に密接になるにつれ、まちのあるズボンが受け

入れられ始め、だんだんと広がっていった。

漢代の壁画なのか、それとも漢代の画像石や画像牌、もしくは陶製の人形、木製の人形であるのか関係なく、漢代の人物はほとんどが袍を着ており、男性は普遍的に着用していて、一部の女性も含まれている。いわゆる袍というのは、臀部より長めに丈のある長衣で、いくつか特徴がある。1つ目は表も裏もしっかりとしている、もしくは、綿や麻でつくってあり、夾袍や綿袍と呼ばれていること。2つ目は、袖の部分が大きくなっており、袖口は絞ってあるものが多いこと。3つ目は、大き目の襟が斜めになっており、襟が大きく開いていて襟口から下着が見えるようになっていること。4つ目は袍の襟、袖、前掛けと後ろの裾の部分が深い色で縁取りされており、上には神話にでてくる足と角がそれぞれ一本ずつしかない龍のような動物か格子模様が刺繍されている。袍の長さも違いがあり、文官や根年長者が着るような踵の長さまであるものもあれ

男子袍服のシンボル（元　張渥『九歌図・少司命』李暁玲による模写）

雑裾垂髯図（東晋　顧恺之『列女伝・仁智図巻』王家斌による模写）

清代馬蹄袖袍服

ば、武将や肉体労働者が着る様な膝下や膝上までしかないものもある。袍が最も重要な服装になった後も、深衣は完全に消失したわけではなく、特に女性用の服としては着用され続けた。漢代の女性服の大襟はますます長くなり、襟を後ろにかけることができるほどであった。湖南長沙馬にある王堆一号漢墓から出土した絹に描かれたものの中に、墓主が襟を後ろにかけることができるタイプの深衣を着ていたデザインがあり、三重の襟、すなわち上着の襟が大きく開いており、中の２層の服の襟が見えている。さらに細かいデザインの飛龍が待っている刺繍がされており、中国女性服の美を見ることができる。

袍のデザインは魏（220 ～ 265）晋（265 ～ 420）南北朝（420 ～ 589）まで発展し、大敞袖（袖口が絞ってないもの）や広くゆったりした襟などが特徴のものに発展し、着ている者が優雅でゆったりとした雰囲気を醸し出せるようになった。この時期、男性の長衣がますます簡単で気軽なものになったが、女性の長衣はますます複雑で華美なものになった。東晋の有名な画家、顧愷之（約 345 ～ 409）の『列女伝・仁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com